

出来事の現象学的地位

—マリオン、ロマーノ、還元の問題—

伊原木 大祐

はじめに

かつてドゥルーズは、『意味の論理学』〔1969〕でルイス・キャロルとストア派を導きの糸としつつ、非物体的な効果としての「出来事 (événement)」を論じ、その独特な地位を言語的な意味に関連づけて理解した。これ以降、出来事に関するテーマ系は、数学素を重視するバディウにせよ、脱構築を標榜するデリダにせよ、現代的思考の展開にとって欠かせない契機の一つになっているように思われる¹。では、このテーマ系をフランス現象学の枠組みに引き戻すならば、どのような議論が可能だろうか。

ジャン＝リュック・マリオンは、現象学三部作の中心に位置する著作『与えられると (Étant donné)』〔1997〕以降、自らが構想する「与え (donation) の現象学」の内部に出来事のカテゴリーを組み込んでいる。他方、クロード・ロマーノもまた出来事概念を練り上げ、『出来事と世界』〔1998〕・『出来事と時間』〔1999〕の二部作を通して「出来事論的解釈学 (herméneutique événementiale)」を提唱するに至った。相互の影響関係が想定される以上、両思考における概念上の親近性は当然のことと言えるかもしれない。ざっと指摘すると、出来事を「因果律」や「充足理由律」から解放しようとする点、出来事を新たな「可能性」概念に結びつける点、「誕生」

¹ Cf. Gilles Deleuze, *Logique du sens*, Paris: Éditions de Minuit, 1969; Alain Badiou, *L'être et l'événement*, Paris: Éditions du Seuil, 1988. あわせて以下の諸論稿を参照されたい。ジャック・デリダ「出来事を語ることのある種の不可能な可能性」(西山雄二・亀井大輔訳)、『終わりのなきデリダ——ハイデガー、サルトル、レヴィナスとの対話』、法政大学出版局、2016年、9-41頁。亀井大輔「歴史・出来事・正義——後期デリダへの一視点」、『立命館文學』625号、2012年、969-980頁。松田智裕「新たなものの出現としての出来事——デリダにおける出来事、偶然性、事実性をめぐって」、『フランス哲学・思想研究』20号、270-279頁。米虫正巳「出来事と存在——ドゥルーズとハイデガー」、『アルケー (関西哲学会年報)』23号、2015年、55-67頁。

の出来事を範例として重視する点、出来事に応じる受け手の側を伝統的主体とは異なる項——マリオンによる「没頭者 (adonné)」、ロマーノによる「到来者 (advenant)」——に置き換える点、などが挙げられよう。だが、興味深いのはむしろ両者の隔たりにある。同じ「現象学」から出発しながらも、まさにその現象学に対する考え方の違いによって、マリオンとロマーノの間には微妙な溝が生じている。両者を比較した先行研究においては、この溝がたんにフッサール寄りかハイデガー寄りか、あるいは現象学的か解釈学的か、といった図式で捉えられてきたふしがある²。けれども、そうした単純な図式には解消しきれない問題が真の争点となっている。

以下ではまず、『与えられると』を中心に、マリオンの現象学的立場から出来事がどのように意味づけられているかを考察する(1)。次に、ロマーノの出来事解釈が提起している基本テーゼを確認した上で(2)、最後に、これら二種の出来事論に伏在する係争事項を浮き彫りにする(3)³。

1. マリオンによる出来事の規定

マリオン現象学の第一著作『還元と与え』[1989]は、結論部で「還元があれば

² 二つの議論を関連づけて論じた先行研究として、以下のものがある。Cf. Shane Mackinlay, « Phenomenality in the Middle. Marion, Romano and the Hermeneutics of the Event », in *Givenness and God. Questions of Jean-Luc Marion*, New York: Fordam University Press, 2005, pp. 167-181; *Interpreting Excess. Jean-Luc Marion, Saturated Phenomena, and Hermeneutics*, New York: Fordam University Press, 2010, pp. 35-116. Claudia Serban, « La méthode phénoménologique, entre réduction et herméneutique », *Les Études philosophiques*, n° 100, 2012/1, pp. 81-100. ただし、マリオンは近刊『与えられたものの捉え直し』の中で上記への応答を果たしている (cf. RdD, 109, n. 1)。

³ 本稿は、2017年3月18日に立命館大学で開催された日仏哲学会2017年春季研究大会での発表原稿を元にしており、JSPS科研費(課題番号16K02130)の助成を受けている。下記の著作を引用する際には、略号と頁数のみを括弧内に記す。

Jean-Luc Marion の著作——**CN**: *Cerititudes négatives*, Paris: Grasset, 2010. **DS**: *De surcroît. Études sur les phénomènes saturés* [2001], Paris: PUF/Quadrige, 2010. **ED**: *Étant donné. Essai d'une phénoménologie de la donation* [1997], 3^e édition corrigé, Paris: PUF/Quadrige, 2005. **PE**: *Le Phénomène érotique. Six méditations* [2003], Paris: Le Livre de Poche, 2004. **RdD**: *Reprise du donné*, Paris: PUF, 2016. **ReD**: *Réduction et donation. Recherches sur Husserl, Heidegger et la phénoménologie*, Paris: PUF, 1989.

Claude Romano の著作——**ACR**: *Au cœur de la raison, la phénoménologie*, Gallimard, 2010. **AT**: *L'aventure temporelle*, Paris: PUF/Quadrige, 2010. **EM**: *L'événement et le monde*, Paris: PUF, 1998. **ET**: *L'événement et le temps* [1999], Paris: PUF/Quadrige, 2012. **IL**: *Il y a*, Paris: PUF, 2003.

あるほど与えがある (Autant de réduction, autant de donation)』(ReD, 303) という原理を打ち出し、もはや対象性にも存在性にも解消されない「呼びかけの純粹形式」が遂行する「第三の還元」というモチーフを提唱した (cf. ReD, 289ff.)。フッサールの流儀で超越論的主観性へと連れ戻すことで、構成された諸対象を与える「第一の還元」、ハイデガーの流儀で現存在へと連れ戻すことで、(存在者とは異なる) 存在の現象を与える「第二の還元」に対し、マリオンによる「第三の還元」は、無規定な呼びかけに不意を突かれた「私 (je)」——「驚かされた者 (l'interloqué)」(ReD, 305) へと遡らせる。ここに出てくる「interloqué」とは、呼びかけに応じるべき「話し相手 (interlocuteur)」として「呼びかけられた者 (der Angesprochene)」(ReD, 300) のことであり、同時にまた、その呼びかけにより「言葉を途中で遮られて (inter-loqué)」驚かされた者をも含意する⁴。

一種の進化モデルとして提示された「三つの還元」(フッサール→ハイデガー→マリオン) という、この単純な「図式化⁵」は早くから批判を受けていたが、ここで何よりもまず論究すべきは、マリオン流の還元によって何が「与え」られるのかという問題であろう。これに関しては、「空虚⁶」な帰結をもたらす『還元と与え』ではなく、第二著作『与えられると』のほうが参考になる。その前書きによると、第三の還元は現象それ自体を「純然たる与えられたもの (pur donné) の地位に連れ戻すものであった」(ED, 9) という。現象学の「第四原理⁷」ないし「最終原理」(DS, 31) から導かれるのは、「現象についての、より広範であると同時により基本的な、新しい定義」(ED, 8) であり、それはもはや対象でも存在者でもない、「与えられたもの (donné)」としての現象という定義である。「自らを示すもの (das Sichzeigende)」というハイデガー的規定より先に、現象はまずもって「自らを与え

⁴ この術語は『与えられると』以降、「没頭者 (l'adonné)」という概念に吸収されてゆく (cf. ED, 367, 371)。

⁵ Dominique Janicaud, *Le tournant théologique de la phénoménologie française*, in *La phénoménologie dans tous ses états*, Paris: Gallimard, 2009, p. 91.

⁶ *Ibid.*, p. 100.

⁷ ミシェル・アンリは論文「現象学の四つの原理」(Michel Henry, « Quatre principes de la phénoménologie », in *Phénoménologie de la vie, tome I: De la phénoménologie*, Paris: PUF, 2003, pp. 77-104) において、ヘルバルトに由来する「仮象の数だけ存在がある」、『イデー』第一巻の「諸原理の原理」、「事象そのものへ」に続く「第四原理」として、マリオンの「Autant de réduction, autant de donation」(ReD, 303) を取り上げた。マリオンはこの議論を引き受けて四つの原理を再理解する (cf. ED, 18-29) だけでなく、上記論文におけるアンリからの批判に対し、「還元と『第四原理』」(RdD, 19-58) の中で反論している。

る (se donne)」。こうして与えられた現象は、還元により実体性を遮断されることで、際立った特徴を呈するようになる。その点を解明するのが『与えられると』の第三部と第四部であり、「出来事」の概念はこれら各部でやや異なる視点から取り上げられている。

第三部「与えられたもの。I. 諸規定」は、上記のような第三の還元を経て内在的に与えられた「現象」に対し、「形態変化 (anamorphose)」・「到着性 (arrivage)」・「既成事実 (fait accompli)」・「偶発事 (incident)」・「出来事」という5つの規定を割り当てる。これらは、第二部の贈与論で取り出された「与え」の諸性格に対応する形で区別されているが (cf. ED, 244-246)、内実として重複する部分も多い。ただし、最初の二つはかなり特殊な語であるため、詳しい説明が必要だろう。「形態変化」の方は、ホルバインの絵画「大使たち」などで使われた絵画技法「アナモルフォーズ (歪像)」(ED, 174, n. 1) に由来する。この絵の下部に書かれた物体は、斜めから見ることで初めて、死を象徴する頭蓋骨の像として現れる。つまり、同じ絵でも見え方によって多様な形態 (morphē) に変化するのと同様、同じもの (例えば「木」) であっても、偶然的にとる形態によって「理論対象」(科学的に種類を特定される「樹木」)、「道具性」(市場で売られる「材木」)、あるいは「習慣現象」(私を太陽から隠す「木陰」の木)として現れる (cf. ED, 182ff.)。現象はその偶然に応じて、複数の様相で現れるのである。これに対し、二つ目の「到着性」はもともと、船が港に接岸して商品が到着する様を意味する語である。商品入荷が気象条件等により不定期であるのと同様、現象もまた「到着することもあれば、到着しないこともあり、そのつど異なっている」(ED, 186)。現象はこのように「断続的なりズムで」到着するため、不規則性や不意打ちといった様態をとる。三つ目の「既成事実」は、すでに完遂した撤回不能な「事実」として押し付けられるという現象の性格であり、四つ目の「偶発事」は、形而上学的前提となる「形相」・「原因」・「本質」なしにそれ自体で到来するという現象の性格を意味する。マリオン現象学の「出来事」は、これら4つの規定を踏まえつつ、先行する作用因に必ずしも制約されない「結果の優位性」(ED, 232)をその基本特徴としている。

現象は自らを与えるものであるかぎり、自己 (soi) としての自律性をもつ。同じく出来事も「自らを作る」ものである以上、私には「それを作ることも、生み出すこともできない」(ED, 226)。出来事はいわば一方的に与えられた「結果 (effet)」なのだ。この生起した結果としての出来事は、第一に「自らの原因 (ないし諸原因)

に先行する」(ED, 233)。というのも、何か起こってしまった事(結果)の「原因」は、必ずその結果の後で事後的に見いだされるからである。したがって、原因とは「結果の結果」(ED, 232)、より厳密に言うとは、「知りたいという意志によって結果に割り当てられた意味の一効果=結果(un effet)」(ED, 234)にすぎない⁸。そして第二に、出来事は「全的原因をもたない」(ED, 235)ため、そのぶん突発的で、予想外にやってくる。例証として挙げられるのは、第一次世界大戦のように、要因が過剰すぎではっきり特定できない「歴史的出来事」と、ブルーストが描写したマドレーヌの味覚のように、理由も分からぬまま快に襲われる「個人的出来事」という、相互に関連しあう二つの事例である。

以上のように「原因から出来事を本質的に解放すること」(ED, 240)で、「反復不可能性 (irrépétabilité)・「超過 (excédent)・「可能性」という他の特性が生じてくる。マリオンは、出来事の個別化を因果の同一性に関連づけたデイヴィッドソンの議論⁹を批判しつつ、原因を特定できないがゆえに「一度しか」起きないものとして出来事の個別化を定義する(反復不可能性)。この「一度しか」ない出来事の生起は、既存の現象世界にそのつど新奇な要素を付け加えることで、先行する状況をたえず無限に超え出るだろう(超過)。こうして、「出来事は新しい系列を開始しながら、その系列の中で過去の諸現象を編成し直す」(ED, 242)ことになる(可能性)。出来事の可能性は、あらかじめ一定の本質を現実化しよう予見された「可能態」ではなく、そのような予見を超えて「本質の外」で到来し、形而上学的には「ありえない (impossible)」地平を切り開く可能性なのである。

さて、こうした第三部の諸規定に対し、第四部「与えられたもの。II. 諸程度」では、現象を与えられ方の度合いに応じて三つに区分し、その一つを現象性のパラダイムとして位置づけることが目論まれる。ここで提起されたのが、「飽和した現象 (phénomène saturé)」という概念である。思考や概念に比して直観が相対的に「貧しい」現象、意味志向が直観によって充実されることで現れる「普通法の」現象に対し (cf. ED, 310ff)、マリオンは、直観が意味や概念を大きく超え出る現象、すなわち「直観で飽和した」現象を想定する。この飽和した現象は、カントのカテゴリ

⁸ 「原因」のこのような原初的な「遅れ」——「遅ればせの認識論的先行性」(CN, 266)については、『否定的確実性』の中でデカルト、ヒューム、ニーチェの名とともに再び取り上げられることになる。

⁹ Cf. Donald Davidson, Essay 8: The Individuation of Events (1969), in *Essays on Actions and Events*, 2nd ed., Oxford: Oxford University Press, 2001, pp.163-180.

リーに含まれた悟性概念の項目（量・質・関係・様相）を背景に「思念しえない」「耐えがたい」「絶対的」「まなざしえない」という形容を託され、最終的にはこの各形容に対応した出来事・偶像・肉・アイコンの4類型に集約される¹⁰。出来事の現象を形容する「（量の見地から）思念しえない」は、出来事を諸部分の総和として捉えることができず、前もって一望できない、それゆえ「予見しえない（imprévisible）」（ED, 280）という意味であり、この予見不可能性には「驚き」（ED, 281, 284）の情が伴う¹¹。マリオンは、この種の直観の過剰について「ワートルローの戦い」（ED, 318-319）を例に説明している。だが、「出来事」のみに焦点を当てて記述した該当箇所は2頁弱の短いものであり、具体例に乏しく、第三部における「第一次世界大戦」の例と相俟って、マリオンの出来事概念が「歴史的事件」に傾斜しているかのような見かけを与える¹²。こうした傾斜は、同じくワートルローの戦いに言及したメルロ＝ポンティへの参照と、「この種の飽和現象に取り組む現象学」を「模範的な仕方」で」（ED, 319, n. 2）練り上げたと評されるリクールへの参照によって強化されている¹³。その後の著作で続けられた出来事の再規定は、この偏りを是正する目的もあるのだろう。前作を補完する第三著作『加えるに〔剰余論〕（De surcroît）』（2001）の第二章「出来事あるいは到来する現象」、マリオン思想の集大成ともいえるべき『否定的確実性』（2009）の第五章「予見しえないもの、すなわち出来事」、現象論の新展開を含んだ近著『与えられたものの捉え直し』（2016）の第四章「現象性の諸限界」を通して、出来事は複数の事例によって裏付けられ、「対象（objet）」との対比で概

¹⁰ 「飽和した現象」の詳細な分析として、拙論「キリストの現象について——ミシェル・アンリとジャン＝リュック・マリオン」『宗教学研究紀要』13号、2016年、3-28頁を参照されたい。

¹¹ ここでの原語は「étonnement」だが、「驚かされた者」や「没頭者」の一特徴として取り上げられた「不意打ち（surprise）」（ReD, 300-301; ED, 370-371）の概念に接続可能であると言ってよい。『与えられたものの捉え直し』の最終節は、まさにこの概念を「出来事」との関係で捉え直した分析になっており、次のような文章で終わっている。「驚き（étonnement）が哲学の始まりを可能にした。不意打ち（surprise）のみが新しい始まりを待ち望むことができる」（RdD, 189）。Cf. Françoise Dastur, « Phénoménologie de l'événement : l'attente et la surprise », in *Études Phénoménologiques*, Volume 13, 1997, pp. 59-75.

¹² ジャニコーはこの議論に次のような皮肉を投げかける。「だが、なんであれ、常に人間的な情勢や状況の不透明さを積み込まれた歴史的出来事に、『純粋さ』など少しでもあるのだろうか」（Dominique Janicaud, *La phénoménologie éclatée*, in *La phénoménologie dans tous ses états.*, p. 218）。

¹³ Cf. Merleau-Ponty, *Phénoménologie de la perception*, Paris: Gallimard, 1945, pp. 416ff; Paul Ricœur, *Temps et récit, III: Le temps raconté*, Paris: Seuil, 1985.

念的に洗練される。中でも「誕生」の出来事は飽和現象の特権的事例となるが、おそらくこの着想に少なからぬ影響を及ぼしたと考えられるのが、ロマーノの議論である。

2. ロマーノによる出来事理解

「ハイデガーの『存在と時間』では、出来事がつねに、手前事物性 (Vorhandenheit) を存在様態とするような世界内部的事実の意味で解されている」(EM, 28)。ロマーノは、『存在と時間』の実存論的分析が「Ereignis」や「Vorkommnis」といった語を事実のレベルでしか捉えていない¹⁴ことを指摘しつつ (cf. EM, 28-29; IL, 88-89; AT, 24-25)、そうした事実には制限されない出来事固有の次元を把握しようとした。この「出来事論的 (événemential) な意味」での出来事は、後期ハイデガーにおける「Er-eignis」とも一線を画している¹⁵。「Es gibt」の「Es」として自ら退去しつつ「存在と時間」を与える固有化 (Er-eignis) の出来事は、マリオンにとっても重大な意味をもっているが (cf. ED, 51-60)、ロマーノからすれば、死、喪、邂逅、決断といったそのつど複数ある日常的出来事の出来事性を的確に指示しうるものではない (cf. AT, 26-28; EM, 26-27)。このような「出来事」には、以下に挙げる「4つの現象学的特徴」(EM, 69)があるとされる。

(1) 世界内部的事実が一義的に指定された基体をもたないのに対し、「出来事はつねに宛先をもち、その結果、出来事の到来する先となる者自身が自らに起こるものの中に巻き込まれる」(EM, 44)。代替不能な自己性において「私」自身がそこに「賭けられて」いる事態こそ、出来事の名にふさわしい。「死という世界内部的な事実は誰にとっても同じものだが、この死という出来事と私がそれに抱く喪の悲しみは、

¹⁴ とりわけ以下のような箇所が参照されている。「『死』は、世界内部的に到来する熟知の出来事 (Ereignis) として出会われている」(Martin Heidegger, *Sein und Zeit*, Tübingen: Max Niemeyer, 17. Aufl., 1993, S. 252f.)。「人は、この不安を、到来しつつある一つの出来事 (ein ankommendes Ereignis) を前にした恐れに逆転させようと、配慮的に気遣う」(S. 254)。「落命が、到来する出来事 (vorkommendes Ereignis) として『たんに』経験的に確実であるにすぎないということは、死の確実性について何ら決定するものではない」(S. 257)。「呼び声は何も陳述しないし、諸々の世界的出来事 (Weltereignisse) について何の情報も与えない」(S. 273)。「しかし、呼び声も、起こった行為も、背負い込んだ責めも、経過する手前事物的なものという性格をもった出来事 (Vorkommnisse) ではない」(S. 291)。

¹⁵ Cf. Claude Romano, « Le possible et l'événement », *Philosophie*, n° 40, 1993, pp. 68-95; n°41, 1994, pp. 60-86, in IL, 55-111.

私自身と他人にとって正確には同じ意味をもたないだろう」(EM, 45)。このように、それ自体は非人稱的な「出来事」へと開かれ、そこに巻き込まれながらもなお自己自身でありうる者を、ローマーノは「到来者 (advenant)」と呼ぶ。到来者の規定については『世界と出来事』第九節 (EM, 72-77) に詳しいが、同書の前書きでも強調されているように、この語が「現在分詞」の名詞化であることに注意しておこう。それは「ある構成された現実」というより「審理中のプロセス」を、「伝統的意味での『主体』」というより「それを通して、それを介して、ある『私』が到来しうるような、主体化の多様な諸様態」(EM, 2)を意味する¹⁶。この到来者が出来事によって自らを危険にさらしながら被る「自己への貫通」(EM, 196)を、ローマーノは「貫通的経験 (ex-pér-ience)」と表現し、従来の経験論とはまったく異なる独自の「経験」理論を展開している。

(2) 世界内部的事実は「それに意味を付与する文脈の内部、すなわち、ある世界の地平において」(EM, 64) 示される。事実は何らかの意味を授ける「先在する諸可能性の全体」(EM, 47) としての世界概念は、「出来事的 (événementiel)」なものである。そこでは、出来事の意味が必ずこの先行文脈の地平から、世界内部の事実として理解され、解釈される。他方、出来事論的な出来事は、文脈から意味を受け取るどころか、逆に「それ自身の文脈を照らすもの」であり、「それに先立つ諸可能性を再設定する = 造り変える (reconfigurer)」(EM, 55)。これにより既存の意味世界は、出来事を理解する上で「意味をなさない (insignifiant)」(EM, 55)ものとなす。出来事は、それ自体「ある新世界の来臨 (avènement)」(EM, 55)となり、到来者にとって「世界創設的な性格」(EM, 69)をもつ。

(3) 世界内部の事実として実現〔現実化〕した事象に対しては、因果関係に基づく説明が可能である。ところが、出来事は「出来事それ自身の起源であるがゆえに」(EM, 60)、それに先立つ諸原因の連鎖によって説明できない¹⁷。そもそも出来事は、

¹⁶ マリオンはこの術語について、「advenant というより advenu、すなわち adonné と言うべきであろう」(CN, 294, n. 2) と過去分詞形への修正を暗に勧めているが、これはローマーノにとって受け入れがたい提案であるように思われる。

¹⁷ 注目すべきは、この文脈で出来事の「起源欠如性 (an-archie)」を語るローマーノが、「予見しえない (imprévisible)」、「過剰な (excessif)」、「剰余 (surcroît)」、「超過 (excédent)」といった、マリオンの著作にも登場する一連の術語を使用している点である (cf. EM, 60-61)。こうした超過を示す術語群への訴えかけは、ローマーノが「可能性」概念を再考する中で「生起可能性 (éventualité)」と呼ぶものを定義する際に、とりわけ顕著な傾向である (cf. EM, 118-122)。

事前にある諸可能性を「現実化」するのではなく、そうした可能性の布置に抜本の変更を加えることで新たに「可能化」し、別の世界を創設する。病院で突然ガンを宣告された男のケースを考えてみよう。遺伝的素因や生活習慣、職場環境など、罹患の理由づけはいくらでも可能だろう。しかし、「なぜ他の人ではなく、この私が？」という問いに対する決定的な答えはない。病の出来事は、ちょうどシレジウスのバラのように「何故なしに (sans pourquoi)」（EM, 80f.）やってくる。その匿名の出来事によって「私の世界」は根底から覆され、以前には「ありえない」ものだった諸可能性がそこに導入される。このように「可能」の真の意味が「不可能」（EM, 119）にあると考えている点で、ロマーノはマリオンと「可能性」概念を共有している。ロマーノによれば、出来事が開く可能性は、「私の現実的な、すなわち実現された諸可能事（事実的可能性）に照らして見ると（……）厳密に不 - 可能なもの」（EM, 121-122）である。たとえば「死」の出来事についても同じことが言える。「死は誰にでも襲いかかってくる。私たちの愛する人々も、誰一人として死を免れない。死はいつでも、どこでも不意にやってくる可能性がある。ずっと昔からではなくても、かなり前から、私たちはこれらのことを『知っている』。けれども、こうした死が起きる際に、最初のリアクションは驚きと信じがたさを伴うことが多い。『まさか、ありえない (Ce n'est pas possible !)]。この言い方は、出来事の逆説的不可能性を適切に述べている」（AT, 31）。

（４）世界内部の事実が「特定可能な現在」において完遂されるのに対し、出来事は時間地平のもとで「時期特定しうる (datable) ものではない」（EM, 64）。出来事は「時間の内に組み込まれるというより、時間を開く、もしくは時間化する」（EM, 64-65, 69; ET, 182）からである。すでに「ある」ものとしての時間の流れに関する単線の理解の枠組み（過去—現在—未来）をロマーノは「時間内部性 (intratemporalité)」（ET, 12ff.）と呼び、それに依拠した伝統的時間論——アウグスチヌスからベルクソン、フッサールの「内的時間意識」までもが含まれる——と決別しようとする¹⁸。出来事は、まず未来からやってきて、それから現在、過去に流

¹⁸ すでにある時間の内部に出来事が置かれるのではなく、逆に出来事の方が時間の構造を（非 - 人称的ないし前 - 主観的な仕方）で設立するのだというロマーノの考えは、第二作『出来事と時間』の中で詳しく論じられる。このような時間化としての出来事の時間性は、「常にすでに過去において、現在のようにあるであろうものであったこと (l'être-toujours-déjà-au-passé-ce-qu'il-sera-comme-présent)」（ET, 182）を意味するという。

れてゆくというのではなく、「自らの未来に照らして過ぎ去ったものとしてしか現在でない」(AT, 82; cf. AT, 80; ET, 182) という形で時間の三次元を一挙に包括する。それゆえ、出来事は「『ずっと前から』すでに起こっていた」(EM, 68) ものとして「まったく新しい未来を拓く」(EM, 65) のであり、二つの時の間に「断層」を穿つことになる。出来事の「静かで見えない」出来の現前に対し、われわれはそれを事後的ないし回顧的にしか実感できない。こうした同時性の欠如、時間的ズレ、位相差は「本質的アポステリオリ」(EM, 68, 69) と表現され、その構造特性ゆえに出来事は、いわば「経験しえない (inexpérimentable)」という性格をもつことになる。

以上の特徴を備えた出来事に焦点を合わせるロマーノは、いくつかの範例——出会い、別離、決断、病、死ないし喪——をもとに「到来者の解釈学」(EM, 33) を遂行する。中でも出来事すべての起源として特別視された例が、誕生という「原初出来事 (proto-événement)」(EM, 137; ET, 275) である。到来者は、いかなる理解の投企にも先立って、まずこの出来事に曝される。誕生という根拠なき「最初の出来事」が、私に世界を与え、開示し、私の全可能性を可能にするのである。この意味で誕生は確かに「起源」だが、「初めから (originellement)」そのようなものとして私に示されるわけではなく、事後にしか「起源的 (originaire)」であると表明されない。こうした「原初的」と「起源的」のギャップ——「起源の起源的な非・原初性 (originaire non-originellité)」(EM, 96; cf. ET, 276) にこそ、誕生の主たる出来事論的意味が存している¹⁹。

能動／受動の区分に先行する「出来事一般への開け」(EM, 125) ないし「過度の曝露」(EM, 99) は「受動可能性 (passibilité)」という語で表されているが²⁰、誕生の受動可能性にあっては、まだその出来事を引き受けるような「自己」が成立していない。誕生には「根本的な無力」(EM, 101) が伴う。その他のケースでは、私が私として出来事に関わり、それが開く新たな諸可能性を私に固有化することもできるだろう。こうした固有化の能力が出来事論的な「自己性 (ipsité)」である。しかし、「誕生はどんな自己性よりも前に私に向けられる」(EM, 104)。誕生の出

¹⁹ この表現は後にマリオンによって引用され、「見事な言い回し」(DS, 52, n. 1) と評価されている。

²⁰ 実を言うと、この術語はもともと、ロマーノが出来事論を構築するにあたって多大な影響を受けたと思われるアンリ・マルディネの「超受容性 (transpassibilité)」概念を念頭に置いたものである (cf. IL, 101, n. 1)。

来事は私にとって、ただ「引き受けえない」ばかりでなく、自己固有のものとして「経験しえない」、さらには「記憶しえない (im-mémorial)」(EM, 106; ET, 276) ものものである。誕生に曝された到来者はこうして、「あらゆる固有化の力を超えるこの贈与」(EM, 106) の「他律」(EM, 107) に委ねられる。

たしかに、この他律性は他者の問いと無縁ではないだろう。「私はけっして一人では生まれえない」(EM, 109) のだから、私の誕生は(肉親を含む)「他者」一般の可能性に先立たれている。しかし、それは他者が私に世界を与えたということではない。「他人」は「事実の上で私を世界に置くとしても、私に世界それ自体を開くことはない」(EM, 110)。世界贈与の源は、誕生という無名の中立的出来事なのであって、他人もまたこの「出来事」によって初めて、私の世界地平に(たとえば「親」という意味を伴った)他人として現れうるのである。

3. 対決の場としての「還元」

ロマーノの議論を参照したマリオンは、誕生がまさに「飽和した現象として(……)与えられる」(DS, 54; cf. ED, 399) ことを強調し、この出来事を積極的に自らの言葉で語り直している (cf. DS, 51-54; CN, 124-126, 293-299)。だが、そうした出来事もあの「第三の還元」に訴えなければ、事象に即して記述できないのだろうか。ここで想起されるのは、ロマーノがマリオン本人を前に投げかけた問いの一つである。マリオンは「自らを与える」現象に「自己」を認め、現象の被構成的ならざる自律性を重んじると主張するのに、「なぜ際立った超越論的方法を示す手続に訴えるのか²¹」とロマーノは問い質す。というのも、還元に伴う視線の転換や連れ戻しは、必然的にそれを遂行する「主観」のようなものを前提してしまう以上、現象の自律性という理想を根底から揺るがしかねないからである。実際、超越論的還元は現象学の遂行に必要不可欠ではないし、その方法としての必然性も論証済みではないというのが、ロマーノの一貫した見方である (cf. ACR, 525ff.; AT, 98-99; IL, 9-11)。『出

²¹ Claude Romano, « Remarques sur la méthode phénoménologique dans *Étant donné* », in *Annales de Philosophie*, 21, Beyrouth: Université Saint-Joseph, 2000, p. 11. また、マリオンが『エロスの現象』で提起した「エロスの還元」(PE, 42ff.) という着想に対する、ロマーノの批判的注釈をあわせて参照されたい。Cf. Claude Romano, « Love in Its Concept : Jean-Luc Marion's The Erotic Phenomenon », in Kevin Hart (éd.), *Counter-Experiences, Reading Jean-Luc Marion*, Notre Dame: Notre Dame University Press, 2007, pp. 328-332.

来事と世界』は還元やエポケーを拒絶し、新たに現象学的「変移 (transition)」(EM, 94; ET, 272) という考えを導入する。先行文脈に依存した出来事的レベルでの世界から、出来事論的な世界への変移は、超越論的還元のような「主観的」手続の結果としてではなく、まさにそれ自体が「非人称的」出来事として生じる。逆から言うと、出来事こそが「この変移そのもの」、「この世界変貌」(EM, 95) なのである。そうである以上、「出来事論的解釈学の中にもはや『還元』はない」(EM, 95)。

これに対し、マリオンはあくまで「還元の現象学的正統性」(RdD, 42) を支持するだろう。その主張によれば、「いかなる現象学も、明示的にせよ (フッサール)、暗示的にせよ (ハイデガー、レヴィナス、アンリ、デリダ)、交渉の余地なき試金石として何らかの還元を活用している。なぜなら、それが数ある概念の一つだからでも、議論すべき教説だからでもなく、現れることの現れを現象そのものの現れることへと連れ戻す操作だからである」(DS, 56-57)。たしかに、いささか図式的な『還元と与え』では、「驚かされた者」たる私への還元=還帰が「呼びかけ」のモチーフを介して一挙に行われた。しかるに、『与えられると』はこの同じ手続をいわば重層化している。第一段階では、対象性や存在性を遮断された「現象性」が純粹に内在的な「与え」として把握される (第一部)。第二段階では、贈与における贈与者・受贈者・贈与物それぞれの超越性が括弧に入れられ (「三重のエポケー」(ED, 122))、贈与現象は、「与えられた」現象の問いに連れ戻される (第二部)。その後、現象という「与えられたもの」の実態が詳しく分析される (第三部・第四部) のだが、最終段階では、こうした現象の受領者が「自らを与えるものから自らを受け取る」(ED, 361) と定式化され、「没頭者 [そこへと与えられた者] (adonné)」と命名された「私」へと連れ戻される (第五部)。今や「飽和した現象に由来する」(ED, 409) とされる「呼びかけ」も、まずはこの没頭者に「自らを与える」のであり、その次に没頭者からの応答——「答唱 (répons)」——があって初めて可視化される (「自らを示す」) ことになる。いずれにせよ、現象へと捧げられた仕方であらう没頭する私は、現象の「自己」に遅れて応じることで、そこからようやく自らの「自己」を受け取るにすぎない。この意味で没頭者は「第二ランクの自我」(DS, 56) に甘んじる以上、もはや超越論的役割を果たせないのだとマリオンは主張する。

しかし、これではロマーノに答えたことにならない。問題視されたのは、現象の受領者ではなく、そこで還元を遂行している「私」の地位である。マリオンは主に二つの側面からこれに答えるようになるだろう。第一に、還元は「常にまず、還元

を遂行する当人を還元する」(DS, 58) という見解である。マリオンによると、還元の遂行者自身がその実施を通じて本質的に「変様されている」(DS, 57)。還元はいかなるタイプのものであれ、還元すべき当のもの(quoi)と還元する者(qui)の両項を還元することで、各々の現出様態を変換してしまう。それゆえ、「第三の還元」を遂行する者は例外なく「没頭者」の様態を取らざるをえない。「そこ[還元]においては私それ自身が、現象化の遂行者、与えの仲介役に変貌している」(RdD, 44)。しかも、このように変貌した遂行者は、もはやただ「主観的」なものではない。驚くべきことに、近年のマリオンがここで自らの議論に接合するのが、パトチカの非主観的現象学なのである。この第二の側面は、当のパトチカが還元よりも「エポケー」を尊重していただけに、奇妙なものに映る。とはいえ、『与えられると』における現象の受領者はすでに、与えられたものを可視的に現象化させる「媒介」、「フィルター」、「プリズム」、「スクリーン」(ED, 364, 365) などと理解されていた²²。マリオンはそうした媒体的機能をもつ没頭者と、パトチカが語るような「人格的指標」や「実行者」としてのエゴ²³、いわば「非主観的なエゴ」(RdD, 143)を接近させる。その上で、これまで彼自身が本格的に論じてこなかった²⁴ (還元といささか相性が悪い)「世界」の問題系を与えの現象学に挿入し、ついには「世界からの呼びかけ」(RdD, 143)、「世界[から]の授与」(RdD, 145)を語り始める。そして、この世界授与は端的に「出来事」(RdD, 146)であるとまで言われるようになる。ここでのマリオンによる「世界」概念は、ロマーノが世界の「出来事的」概念および「出来事論的」概念から区別して、「意味が『ある(il y a)』こと」自体を可能にしていると考え、「『超越的』とでも呼べそうな第三の『世界』概念」(ET, 306)にも類似したものである。

²² 少なくともこの点においては、「与えの現象学」を新田義弘の「現象学的媒体論」に引き付けて考えることも可能だろう。新田義弘『思惟の道としての現象学——超越論的媒体性と哲学の新たな方向』、以文社、2009年参照。

²³ Cf. Jan Patočka, *Qu'est-ce que la phénoménologie ?*, traduit par Erika Abrams, Grenoble: Jérôme Millon, 2002, p. 186, 208.

²⁴ 「adonné と世界との相互関係性の欠如」というマッキンレーの指摘とともに、「ジャン＝リュック・マリオンの著作には世界への参照がむしろ欠けている」というセルバンの評言を参照のこと。Cf. S. Mackinlay, « Phenomenality in the Middle. Marion, Romano and the Hermeneutics of the Event », *op. cit.*, p. 179; C. Serban, « La méthode phénoménologique, entre réduction et herméneutique », *op. cit.*, p. 87.

おわりに

出来事をめぐる二つの現象学的思考は、その語り口やアイデアに共有するものが多くあるとはいえ、元来は異なる意図から発していた。マリオンの目標は、形而上学に陥らない形で「現象」の包括的・総合的規定にあった。その中で出来事は、与えられた現象の「特徴」として規定され、さらには、現象性の「パラダイム」(ED, 316)たる飽和現象の「類型」とされた。これに比べ、ロマーノの議論は、初めから出来事という現象の優位性に照準を合わせることで、世界・時間・自己の生起を非・超越論的な仕方にて記述することに主眼があった。このため、ロマーノの枠組みはマリオン現象学の射程よりも「狭い」ように見えるが、そのことで逆にマリオンより首尾一貫した論理性を保つ。その一例が、事実の事実性をめぐる両議論の乖離である。ロマーノにとって出来事は、たしかに「事実でもある」(EM, 120)が、他方でまた事実には——ましてや「既成事実」(EM, 64, 171)には——縮減しえない出来事論的な意味を有する。この意味の解明が「出会い」や「死」の分析を含む「到来者の解釈学」となっていた。ところが、出来事をもっぱら「対象」との対比で捉えるマリオン (cf. CN, 243ff.) は、歴史的事件のような例が「事実」としての出来事なのか、到来者を巻き込んで出来事論的な世界を開く「出来事」なのかを曖昧にしてしまう。歴史記述や歴史物語における「ワーテルローの戦い」は、ロマーノ解釈学からすれば、必ずしも真の「出来事」ではなく、世界内部的事実に降格された出来事、場合によっては「脱世界化」された「情報」(EM, 272)にすぎないだろうが、マリオンの議論ではこうした区別を考慮すべくもない (cf. ED, 318-319)。さらにマリオンは、与えられた現象の特徴として「既成事実」と「出来事」を並置していた。前者の完了的・既決的な事実性と、後者の未来的・革新的な可能性は、どのように絡み合い、共存しているのか。そもそも与えの現象学において「時間」はどのように与えられるのか。時間への言及は散見されるものの (cf. ED, 307-309; DS, 39-41; PE, 59-67; RdD, 177-179)、与えられた現象の時間性を総括するような体系的時間論への取り組みは、先行の現象学者たち (フッサール、ハイデガー、レヴィナスなど) に比べればやや弱いと言えそうである。

とはいえ、マリオンとロマーノの思想は内容面でますます接近している。『否定的確実性』のマリオンは、ついに飽和現象の全体を「出来事タイプの現象」として再理解し、その一類型であった元来の「出来事」概念を「限定的意味での出来事」

と呼んで区別するようになる (CN, 301, n. 1)。これはおそらく、与えの現象学がたえざる受容と摂取を通じて「出来事論的解釈学」に歩み寄っているためであって、その逆の理由によるものではない。批判を受けるたびにマリオンが忍ばせる巧みな軌道修正は、たしかにその現象学思想をより包括的なものにするだろうが、これと引き換えに彼の初期神学思想が重視していた「イコン」論（としての他者論）を後退させ、代わりに出来事の現象を中心化することになる。

当初のマリオンによると、「飽和した現象」の諸類型（出来事・偶像・肉・イコン）は「いかなるヒエラルキーもなしに」（ED, 317）区別されるはずだったが、それでも最後の「イコン」だけは、「先の三種類の飽和現象がもつ特殊性格をその内に取り集める」（ED, 324）ものとして、やはり特別な地位に置かれていた。そして、そこでのイコン重視の立場は、ある程度までは『偶像と距離』〔1977〕・『存在なき神』〔1982〕での初期神学的立場を継承するものであった。とはいえ、現時点から振り返ってみると、逆に「出来事」の方が「イコン」の現象（他者性）をよりよく説明しうるかのように見えてくる。このことは、「還元」と「与え」を介した分析よりも「出来事論的」な分析の方が、個々の記述のディテールにおいて、たとえば他者・自己・世界・時間といった根本現象の解明に対して、より有効であることを示唆しているのではないだろうか²⁵。

²⁵ おそらく、同じ視点からマリオン神学を出来論的に再変容させてゆく方向を示唆できるかもしれない。その際にとりわけ興味深いのは、武内義範による宗教哲学思想との交差可能性である。武内は宗教的作用の一類型として「非日常的事件」と「日常的生」の遭遇を挙げていたが、ここでの「非日常的事件」概念を出来事論的な意味での出来事＝事件 (événement) の側から考え直すことで、武内宗教哲学とマリオン神学との間に一定の思想的連関を設立できるようになるだろう。「非日常的事件は突発する。突発する事件は、日常的秩序の中に入らない。のみならず、本来それはこの秩序の破壊者として出現するのである。したがって非日常的事件が生起しているか否かは、客観的には日常的生の秩序が破壊せられ混乱せしめられているか否かを検討すればよい」（『武内義範著作集』第四巻、法蔵館、1999年、17頁）。

文献表

- Badiou, Alain, *L'être et l'événement*, Paris: Éditions du Seuil, 1988.
- Dastur, Françoise, « Phénoménologie de l'événement : l'attente et la surprise », in *Études Phénoménologiques*, Volume 13, 1997, pp. 59-75.
- Davidson, Donald, *Essays on Actions and Events*, 2nd ed., Oxford: Oxford University Press, 2001.
- Deleuze, Gille, *Logique du sens*, Paris: Éditions de Minuit, 1969.
- Hart, Kevin (éd.), *Counter-Experiences, Reading Jean-Luc Marion*, Notre Dame: Notre Dame University Press, 2007.
- Heidegger, Martin, *Sein und Zeit*, Tübingen: Max Niemeyer, 17. Aufl., 1993.
- Henry, Michel, « Quatre principes de la phénoménologie », in *Phénoménologie de la vie, tome I: De la phénoménologie*, Paris: PUF, 2003.
- Janicaud, Dominique, *La phénoménologie dans tous ses états*, Paris: Gallimard, 2009.
- Mackinlay, Shane, « Phenomenality in the Middle. Marion, Romano and the Hermeneutics of the Event », in *Givenness and God. Questions of Jean-Luc Marion*, New York: Fordam University Press, 2005, pp. 167-181.
- , *Interpreting Excess. Jean-Luc Marion, Saturated Phenomena, and Hermeneutics*, New York: Fordam University Press, 2010
- Marion, Jean-Luc, *Cerititudes négatives*, Paris: Grasset, 2010.
- , *De surcroît. Études sur les phénomènes saturés* [2001], Paris: PUF/Quadrige, 2010.
- , *Étant donné. Essai d'une phénoménologie de la donation* [1997], 3^e édition corrigé, Paris: PUF/Quadrige, 2005.
- , *Le Phénomène érotique. Six méditations* [2003], Paris: Le Livre de Poche, 2004.
- , *Reprise du donné*, Paris: PUF, 2016.
- , *Réduction et donation. Recherches sur Husserl, Heidegger et la phénoménologie*, Paris: PUF, 1989.
- Merleau-Ponty, Maurice, *Phénoménologie de la perception*, Paris: Gallimard, 1945.
- Patočka, Jan, *Qu'est-ce que la phénoménologie ?*, traduit par Erika Abrams, Grenoble: Jérôme Millon, 2002.
- Ricœur, Paul, *Temps et récit, III: Le temps raconté*, Paris: Seuil, 1985.
- Romano, Claude, *Au cœur de la raison, la phénoménologie*, Gallimard, 2010.
- , *L'aventure temporelle*, Paris: PUF/Quadrige, 2010.
- , *L'événement et le monde*, Paris: PUF, 1998.
- , *L'événement et le temps* [1999], Paris: PUF/Quadrige, 2012.
- , *Il y a*, Paris: PUF, 2003.
- , « Remarques sur la méthode phénoménologique dans *Étant donné* », in *Annales de Philosophie*, 21, Beyrouth: Université Saint-Joseph, 2000.

Serban, Claudia, « La méthode phénoménologique, entre réduction et herméneutique », *Les Études philosophiques*, n° 100, 2012/1, pp. 81-100.

伊原木大祐「キリストの現象について——ミシェル・アンリとジャン＝リュック・マリオン」『宗教学研究室紀要』13号、2016年、3-28頁

亀井大輔「歴史・出来事・正義——後期デリダへの一視点」、『立命館文學』625号、2012年、969-980頁。

米虫正巳「出来事と存在——ドゥルーズとハイデガー」、『アルケー（関西哲学会年報）』23号、2015年、55-67頁。

武内義範「宗教哲学」『武内義範著作集』第四卷、法蔵館、1999年、3-30頁。

デリダ、ジャック「出来事を語ることのある種の不可能な可能性」（西山雄二・亀井大輔訳）、『終わりなきデリダ——ハイデガー、サルトル、レヴィナスとの対話』、法政大学出版局、2016年、9-41頁。

新田義弘『思惟の道としての現象学——超越論的媒体性と哲学の新たな方向』、以文社、2009年。

松田智裕「新たなものの出現としての出来事——デリダにおける出来事、偶然性、事実性をめぐって」『フランス哲学・思想研究』20号、270-279頁。

